

令和 6 年 9 月 5 日現在

機関番号：37502

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2020～2023

課題番号：20K01082

研究課題名（和文）鎖国形成期から近代初期開国期にいたるキリシタン墓碑の考古学的研究

研究課題名（英文）A Study on the tomb of Hidden Christian in Japan

研究代表者

田中 裕介（tanaka, yusuke）

別府大学・文学部・教授

研究者番号：30633987

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,400,000円

研究成果の概要（和文）：江戸時代のキリシタン墓地を対象に、墓碑を中心に考古学的調査を行った。その結果、キリスト教禁制によって墓石が変容する過程を、大分県南部地域と熊本県天草地域で行い、十字架文様や洗礼名が消失しても、1640年代から60年代までキリシタン特有の長方形伏碑を使い続け、寛文年間には方形に変容したうえで、元禄年間には戒名を刻む近世的墓石に変容する過程を後付けることができた。

これは1660年代まで豊後と天草では切支丹類族改め制度が確立するころにはキリスト教の信仰が途絶えたことを、墓地と墓石の研究から推定できた。これは潜伏キリシタンが明治時代まで存続した西九州とは異なる歴史があったことを示している。

研究成果の学術的意義や社会的意義

世界的に知られている江戸時代の潜伏キリシタンの信仰や生活については、これまで明治時代以後のカクレキリシタン信仰を維持した人々の、文献資料を利用した研究や、民俗学・宗教学からのアプローチが中心で、現在まで残された同時代の石造物を利用した研究は、長崎浦上の潜伏キリシタン信徒の墓石をあつかった片岡弥吉の20世紀中ごろの研究が唯一のものであった。

今回浦上を含めて天草と豊後地方の潜伏キリシタンの墓石に残された墓制を広く調査することで布教期から潜伏期に至る潜伏キリシタンの墓制を考古学から復元して、その信仰の一定の側面を考古資料からアプローチできることを示した。

研究成果の概要（英文）：An archaeological survey was conducted focusing on gravestones at Christian cemeteries from the Edo period. As a result, we were able to trace the process by which gravestones were transformed due to the prohibition of Christianity in the southern region of Oita Prefecture and the Amakusa region of Kumamoto Prefecture, and even though the cross motifs and baptismal names disappeared, until the Kanbun era, when they were transformed into square-shaped stones, and then in the Genroku era, they were transformed into Edo-style gravestones with Buddhist posthumous names engraved on them.

From research into graveyards and gravestones, it was possible to infer that the Christian faith had died out by the 1660s, around the time the system of Christian conversion and reformation was established in Bungo and Amakusa. This indicates that there was a different history to that of western Kyushu, where the hidden Christians continued to exist until the

研究分野：日本考古学、キリシタン考古学

キーワード：考古学から読み解く キリシタン史 潜伏キリシタンの墓制

### 1. 研究開始当初の背景

田中は2002年以来キリシタン墓碑の考古学的研究をおこない、キリシタン墓碑の存続年代が1580年代から1620年代に限られることを確認した。同時に1620年元和末年ごろを境に中世的五輪塔や宝篋印塔が大名や武士層など身分の上層を除いて衰退し、近世の墓碑型式と入れ替わること、西九州では新たに唐人墓が出現することなど予想された。さらに18世紀の後葉には石造のオランダ人墓があらわれる。中世の宗教別の墓碑から、日本人・唐人・オランダ人という民族別の墓碑に転換し、固有のキリシタン墓碑はそのよおうな墓碑の歴史的転換のなかで消滅すると考えられた。

ところが2010年から始まった大分県臼杵市下藤キリシタン墓地の調査は、墓石以外に地上標識となる石組遺構と従来キリシタン墓碑とは見なされてこなかった未整形の伏碑型墓碑が用いられていることが判明し、さらに神野(こう)の家墓地の調査において1656(明暦2)年銘の近世墓碑の台石がキリシタン伏碑であることを確認した。そのキリシタン墓石の系譜をひく伏碑型墓碑が1620年代以後も17世紀中ごろまで存続する可能性が示唆された。

さらに18世紀中葉の長崎市浦上地区の墓碑が布教期の伏碑と同一形式の切妻形墓碑であることを確認した。つまり一部の地域では禁教期に入ってもキリシタン墓碑が18世紀にも存続しているのである。

そこで潜伏初期から明治の復活期までの潜伏キリシタンの墓碑資料を予備的に集成したところ、考古学的な分類と形式変化と紀年銘による年代設定が可能であるという見通しを得た。

### 2. 研究の目的

江戸時代の基本的性格は17世紀前半に強力に押し進められたいわゆる「鎖国」政策とキリシタン禁制政策によって形成された。鎖国の原因となったキリシタン禁制は、200年以上も続いて19世紀中ごろ西欧諸国の圧力によってようやく明治初期になって廃止されるほど、日本の近世社会を特徴づける政策であった。その200年を超える禁教時代になお信仰を維持した潜伏キリシタンの墓地や墓碑が最近明らかになってきた。本研究はその実態を考古学的に研究し、墓碑と墓地の特徴を明らかにし、墓碑の型式設定や墓碑年代決定等の基礎的研究をおこなうことを目的としている。

**潜伏期のキリシタン墓地調査** キリシタン禁教がはじまった1610年代から、幕末明治の開国政策によりキリスト教が解禁された1870年代の明治時代まで、九州西部を中心に潜伏したキリシタンの存在が知られている。禁教時代には建前上キリシタンは弾圧によってキリスト教徒は棄教しているので、キリシタン墓碑も存在しないはずである。ところがその時代のキリシタン墓碑と考えられる石造墓石が九州各地に存在することが明らかになってきた。その多くは近世初期のキリシタン墓碑の形態的系譜をたどれる墓碑であり、一部には紀年銘資料も存在する。そこで考古学的方法によって墓碑資料を収集し、その形態的特徴、型式学的変遷、年代等の基礎的研究をおこなった。

### 3. 研究の方法

作業として①禁教時代のキリシタン墓碑の年代的、型式学的変遷と系譜を検討するために考古学的方法による測量、作図・記載を行って基準資料を作成する。具体的に1614年から1660年代の「崩れ」(キリシタン露見による大量弾圧事件)までの初期潜伏キリシタンの動向と、その後の切支丹類族制度の動向など1873(明治6)年の切支丹高札撤去以前の信仰を、考古資料としての墓碑資料から究明し、各種の近世墓地と潜伏時代キリシタン墓の変遷の方向、画期、消長を比較して近世キリシタンの動向を考古資料によって研究する。

**潜伏初期のキリシタン墓地調査** 1614(慶長19)年の禁教期前後から17世紀後半の墓地を対象とする。対象遺跡は大分県豊後大野市栗ヶ畑墓地、熊本県菊池市上木庭墓地、熊本県天草市のキリシタン墓地群である。

**潜伏期のキリシタン墓地調査** 大分県内の17世紀後半から18世紀の切支丹類族の墓制を明らかにするため、伏碑形墓碑からの系譜をひくとされていりいわゆる「斗枿墓」等の墓碑、特に紀年銘資料の集成を行い、その真偽を検討する資料をえる。まず18世紀中頃の紀年銘資料を有する長崎県長崎市浦上地区の墓碑群の実測調査を行いその特徴を記録する。特に浦上一番崩れの故地で片岡弥吉の銘文読解によって18世紀中ごろの潜伏キリシタンの墓碑であることが明白かつ、かねてより知られている経ヶ峰墓地の墓碑を中心に実測調査を行う。

**明治初期のキリシタン墓地の調査** 明治初年の新政府のキリスト教弾圧により配流された浦上キリシタンの墓地のひとつである鹿児島市福昌寺キリシタン墓地の調査をおこなう。この墓地は明治3(1870)年ないし明治4(1871)年の銘文をもつ墓碑と自然石の墓石からなり、明治6(1873)年の切支丹禁制高札撤去以前の薩摩藩配流中の死者の墓碑であるが、仏教形式ではなく洗礼名を記載するという稀有な例であり、自然石墓石の形態も長崎の浦上キリシタンの浦上一番崩れ以後の墓碑形式である野石墓地の形態を踏襲している可能性がある。

#### 4. 研究成果

全体を通じてまず第1に、1610年代から20年代にかけて実質的に進行したキリスト教禁制によって変容する墓地の調査を、大分県豊後大野市栗ヶ畑亀甲墓地と同県臼杵市搔懐墓地と熊本県天草市富士尾墓地で行い、墓碑から十字架文様や洗礼名の銘文が消失しても、1640年代から60年代までキリシタン特有の長方形の伏碑を使い続けていることが判明した。60年代の寛文年間には長方形から方形に墓碑の形態が変容したうえで、元禄年間にはその上に戒名を刻む近世的立碑形の墓石に変容する流れを栗ヶ畑墓地や搔懐墓地で後付けることができた。これは1660年代寛文期まで豊後と天草地域ではキリシタンが潜伏できたが、その後切支丹類族改め制度が確立するころにはキリスト教の信仰が途絶えたことを意味しており、墓地と墓石の研究からその変化を追跡できることが可能であることをしめす。またその歴史的意義は潜伏キリシタンが明治時代まで存続した西九州とは異なる歴史があったことを示している。

第2に江戸時代を生き抜いた潜伏キリシタンのうち長崎市の浦上の潜伏キリシタンに注目し、その墓地に残る18世紀の墓石調査を浦上経の峰墓地で行い、18世紀の中ごろに戒名を使わない長方形の伏碑を使っていることを考古学の面から確定した。あまり注目されてこなかったが墓碑の正面に銘文を刻むための彫りくぼめがあり、それは同時代の仏教墓碑の形態の影響を受けており、潜伏キリシタンの信仰形態を反映していると考えられた。

第3に幕末から明治初期の「浦上四番崩れ」に伴う浦上キリシタンの配流先の墓地である鹿児島市福昌寺墓地を調査し、明治3年と4年の配流中の死者の洗礼名が刻まれた墓碑と、潜伏時代そのままに変容した十字表現を刻んだ「野石」墓石からなる墓地であることを明らかにした。その墓碑が明治6年までの配流中に建てられたのか、その後建てられたのか慎重に検討することが求められる。野石墓地に刻まれた変容した十字架表現は、浦上キリシタンに伝承されてきた十字架に対する信仰形態の変容をよく示していると考えられる。

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 田中裕介	4. 巻 51
2. 論文標題 静岡県掛川市天然寺ゲイスベルト・ヘンミイ墓	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 史学論叢	6. 最初と最後の頁 139、151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32289/sg05109	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 田中裕介	4. 巻 35
2. 論文標題 キリシタン石造十字架碑の研究	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 石造文化研究	6. 最初と最後の頁 1-20
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中裕介	4. 巻 164
2. 論文標題 キリシタン墓研究の歩み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 19-24
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 田中裕介	4. 巻 164
2. 論文標題 キリシタン墓碑研究の現状	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 季刊考古学	6. 最初と最後の頁 72-78
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 田中裕介
2. 発表標題 千々石ミゲル夫妻墓所の調査
3. 学会等名 九州考古学会総会研究発表
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 大友・太田編	4. 発行年 2022年
2. 出版社 マレガプロジェクト（国文学研究資料館）	5. 総ページ数 531
3. 書名 マリオ・マレガ資料の総合的研究	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------